

レイン 8

孤高の戦士

吉野 匠 Takumi Yoshino



アルファポリス文庫



異世界に存在する大陸、ミュールゲニア。
科学文明の魔手はまだこの地を覆うことなく、廃れつつあるとはいえ、いにしえより伝わる魔法も細々と受け継がれている。

そんな、剣と魔法が支配する世界――

レインが傭兵ロイと戦っている最中、ガルフォート城に戻ったシェルファの前に一人の女刺客が立ち塞がった。

刺客の名はクレア。

彼女はかつて、暗殺者を使いシェルファを襲ったこともある、謎の組織の宗主であった。そして、今もシェルファを忌み嫌い、その命を奪おうとしている。

シェルファを助けるため、ラルファスとナイゼルがクレアに斬り掛かった。しかし、見かけに似合わず力強いクレアの剣技に、二人は苦戦を強いられる。かろうじて足止めをするのが精一杯だった。その際に、シェルファは王宮へ逃げようとするも……

レインはシェルファの危機に間に合うのか！



※度量衡はあえてそのままにしています。





【ガサラム】
レインの副官



【セノア】
レインの副官



【レニ】
レインの副官



【ギュンター】
レインの腹心。主に諜報を担当



【ユーリ】
レインの部下



【セルフイー】
レインの部下



【アリサ】
魔族を狙う戦士



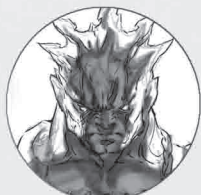
【ノエル】
レインに味方する魔人少女



【シルヴィア】
ヴァンパイア・マスター



【クラレンス】
上位魔人



【フィランダー】
レイグルの盟友



【クレア】
謎の組織の宗主

主な登場人物

レイン

本編の主人公。本人曰く、
「傲岸不遜と常勝不敗が
売りの、世界最強の男」

ラルファス

レインの親友で、
サンクワールの
上將軍



シェルフア

サンクワールの
プリンセス
姫王。
レインに好意を
抱いている



レイグル

大国ザーマインを
統べる王



目次

プロローグ	ゲイニス城の客人	11
第一章	スリーピングビューティー	23
第二章	我が王子が来たり	55
第三章	死闘の果て	86
第四章	訪問者	124
第五章	予知夢	183
第六章	孤高の戦士	232
エピローグ	自由のために！	306
あとがき		314
文庫版あとがき		316

プロローグ ゲイニス城の客人

ザーマインの王都、リアグルの大通りを、一人の少年が歩いている。

前開きの薄い生地じょういの上衣は、金色のボタンが並ぶ他は質素なデザインだが、少年の長い髪と同じく、純白である。おまけに彼は、肌はだの色さえも女性顔負けの色白だった。綺麗な上がり眉と澄んだ碧眼びよくをしており、絶えず微笑を浮かべているせいか、その美貌と相まって、人目を引くこと夥しい——はずなのだが。

大通りを行く人々は、なぜか誰一人として彼に注目しない。

にもかかわらず、不思議なことに彼の行く手は自然に開けていく……前を塞ぐ皆が、なぜか道を空けるからだ。

少年は片方のポケットに手をつ突っ込んだまま、機嫌よく散歩するかのように歩を進めている。まるで、自宅の庭を行くようなくつろぎようである。

そのうち、真ん中で分けた前髪を手で払い、少年……いや、魔族のクラレンスは楽しそうに前方を見る。ちょうど、目的地であるゲイニス城に到着したところだった。

二重に城を囲む堀や、二箇所に渡された巨大な吊り橋、それに城門を守る守備兵などを、なんとなく見渡す。

しばらくして軽く頷いた。

「うん、悪くない。過剰に華美じゃないのに、防御力は高いレベルにあるようだ。僕的好みかな？ まあ、どのみちどんな城だって、僕には意味ないけど」
軽く笑い声を立て、クラレンスはまた歩き始めた。眼前では武装した兵士が警戒に当たっているのだが、彼らが見据える前を、彼は平然と通り過ぎていく。

結局、誰にも止められないまま、クラレンスはゲイニス城に入ってしまった。

「さて、歴史はどう動くかな。ここでレイグルと戦うことになるか、それとも――。いずれにせよ、退屈する心配だけはなさそうだね」

楽しそうに独白し、クラレンスは城内を堂々と進んだ。



ちょうどその時、レイグルは魔族の仲間達と一緒にいた。
それも、珍しくサロンの一つにいたのだ。

かつては貴族社会の象徴だったサントワールの主城のものには劣るかもしれないが、このゲイニス城にも、以前は貴族達が娯楽目的で設けた客間……つまりサロンがある。

レイグルは仲間の魔族達と話し合う時には、軍議の間や謁見の間はあまり使わず、ほ

とんどは自らの私室や、このようなサロンを利用したのである。

彫刻が施された長方形のテーブルに着き、レイグルは仲間を……特に対面に座るサラを見ていた。別に非難するような目付きではないのだが、心当たりがあるのか、サラの顔色は優れなかった。

「……ふむ。おまえが、詳しいことは何も知らないのはわかった、サラ。しかし、可能ならもっと早く俺に報告すべきだったな」

「も、申し訳ありません、レイグル様っ」

サラはいつもに似合わず、ひたすら頭を下げている。別に叱責とまではいかないのだが、軽く注意されるだけでも、サラにとっては応えるのである……もちろん、相手がレイグルの時のみだが。

冷や汗まにかいたサラは、座したまま、また低頭する。眼前には温かいコーヒーが用意されているのだが、カップを手を取ろうとしなかった。

「あたしは相談を受けてはいましたが、まさかデューイが本当にあいつの家族を殺しに行くなどとは思いません……そこまでご報告することはないだろうと思ったのです」

サラが話し終えると、テーブルの上に沈黙が落ちた。

黙したままのレイグルに耐えきれず、サラは彼の隣に座すファイランダーに、助けを求めるように視線を向けた。これも、普段なら考えられないことである。

それに応じたわけではなからうが、ファイランダーが重い口を開く。

「問題は、あのデューイを誰が倒したかだな。レインかもしれないが……もちろん、まるで違う誰かによって倒された可能性もある。発見が遅れたのが残念だ」

レイグル達が仲間の死を知ってから、まだ数日しか経っていない。行方不明とはいえ、まさか既に死んでいるなどとは予想外だったのだ。

その事実が、フィランダーの口調を普段にも増して重くしていた。

「そうだな……ヤツの自業自得だが、調査の必要はある」

レイグルはやつと頷いた。

改めてサラを見る。

「サラ、おまえが仲間を売りたくなかった気持ちは理解できる。おまえが今回の一件に関係していないこともよくわかった。遅きに失したとはいえ、俺に全てを話したことだし、この件については俺も目を瞑ろう」

あからさまにほっとした顔のサラが何か言う前に、レイグルは言葉を重ねた。

「ただし、今後のためにも、一つだけ覚えておいてもらう。言うまでもないが、俺の警告に二度目はない」

冷徹な上に、射抜くがごとき眼光に、サラが唇を震わせる。

レイグルはゆっくりと申し渡した。

「――殺すべき敵を間違えるな、サラ」

「は、はいっ」

サラは即答した。

「次は言い訳も聞かぬ。俺の言いたいことはわかるな。それとも説明が必要か？」

「いえっ」

額がテーブルにつくほど、深々と頭を下げる。

「二度と……二度と、敵以外の者を襲おうなどとは考えませんっ」

「ならば、もういい」

闇を映したようなレイグルの瞳が穏やかになる。彼としては優しい部類に入る声で言い渡した。

「前にも言ったが、おまえには期待している。つまらないことを考えず、今後も俺の役に立て」

「もちろんですわっ。あたしはいつだってレイグル様を」

彼の声音に何か感じるところがあったのか、サラは感激した表情で何かを言いかけた。しかしその時、レイグルは急にさっと立ち上がった。テーブルからやや離れ、扉の方を見る。

常に悠然とした動作を見せる彼にしては、性急に過ぎる動きだった。お陰でサラは明らかに、瞑目していたフィランダーまで目を開き、眉根を寄せた。

「……どうした、レイグル？」

彼に応えるように、いきなりノックの音がした。

しかし今は、衛兵すら遠ざけ、密談の最中だったのだ。城内の者にはきつく申し渡しであるし、敵襲でもない限り、誰かがノックなどするわけがない。

他の二人も異常に気付き、結局、三人の魔族は総立ちになってドアを見た。一拍置き、ドアが開く。

上から下まで白い衣装に身を包んだクラレンスが、にこやかに入ってきた。

「君は随分と力を付けたらしいなあ。僕の気配にもちゃんと気付いたね」

「……他人の城にずかずか踏み込んでくるヤツの言うことか」

既にレイグルは落ち着きを取り戻していた。ただし、フィランダーとサラは別である。両名とも、張り詰めた顔でクラレンスを眺めている。二人とも、初対面ではないのだ。

真っ先にサラが反応した。

長大なテーブルを身軽に飛び越え、レイグルのもとへと走ったのだ。盾になるかのように、主の斜め前に立つ。

「何しに來たのさっ」

早くも片手を戦闘形態に変化させ、サラは怒鳴りつけた。ただし、声が少し震えていたが。

クラレンスは目を細めてサラを見た。

「注意した方がいいな……君、命の瀬戸際かもしれないよ。僕は割と寛大な方だと思っけど、弱い癖に吠える犬は嫌いだ」

声を失ったサラを押さえ、レイグルが代わりに前へ出た。

「では、俺が問おう。何の用事だ、クラレンス」

クラレンスの殺気が和らいだ。

「ああ、慌てないでほしい。まだ戦いになると決まったわけじゃない。実は君に、二つほど提案があつてね」

「提案だと？ そんな間柄ではなかったはずだが」

レイグルの言いように、クラレンスは肩をすくめた。

「昔は昔じゃないか。それに今の僕は、立場的には君と似たようなものだ」

レイグルは答えず、ただ目で促した。

「では、提案する。まず、その女ともう一人が、私怨で敵の家族を殺そうとしたのは既に知っているみたいだが」

クラレンスは厳しい目で一瞬だけサラを見やり、

「一つめの提案とは彼女のことだ。……魔族の面汚しにしかないらしいやつを、君は殺すか放逐すべきじゃないのかな」

室内の空気がどつと重くなった。

一言も話さなかったフィランダーの口元が、厳しく引き締まり、その闘気が増していく。一方、白い頬に汗の筋をつけたサラは、ただひたすらレイグルの反応を窺っている。肝心のレイグルは、じっとクラレンスを見据えた。

「つまり、おまえがデューイを殺したのか？」

「氣に入らないから、殺そうとしたのは事実だけどね」

輝く長い白髪を背中に払い、クラレンスは有るか無きかの微笑を浮かべる。

「だが、デューイを殺したのは違う人だよ。僕じゃない」

「そんな嘘を誰が——」

激した口調でサラが割り込みかけたが……クラレンスが視線を向けると、ふつりとセリフが途切れた。彼女自身の意志ではない証拠に、苦しうに喘いでいる。唇を震わせ、まるで酸欠寸前の有様だった。明らかにクラレンスが何かしたのだ。

「うるさいとはつきり言わなきゃわからないのか。僕は今、レイグルと話している。君はお呼びじゃない……誰の前にいるのか、いい加減に自覚した方がいいな」

ゆつくりとレイグルに向き直る。

「それで君の返事は？ イエスなら、僕自らの手で、即座にサラを消滅させてやるよ。実のところ気まぐれで訊いてるけど、本当は勝手にそうしようと思っただけくらいでさ。一応尋ねたのは、これでも君に配慮したものと思ってくれ」

「返事を聞きたいと言うのか」

言いかけ、レイグルは思い出したようにサラの肩に軽く触れた。その刹那、サラが大きく息を吐く。すぐに眼前のテーブルに両手をつき、派手に咳き込み始めた。やっとともに動けるようになったらしい。

それを見やり、レイグルは素っ気なく答えた。

「——断る！ サラは俺の望むところに応えている……少なくとも応えようとしている。おまえにくれてやるわけにはいかん」

サラがぱっと顔を上げた。

感激のせいかな、大人びた美貌をくしゃくしゃにしていた。潤んだ瞳で何か言おうとしたが、声にならなかった。

「ほお？」

クラレンスは怒るところか、益々楽しそうな顔になった。

「僕の提案を無下にするわけだ。……断ったらどうなるか、考えてみたのかい」

レイグルの凍てついた声音に、嘲笑の響きが混じった。

「断ったらどうなるかだ？ しばらく見ないうちに、とぼけたことを言うようになつたものだ。魔界の原則を知らぬおまえではあるまい」

傲然と顎を上げ、レイグルはクラレンスの視線を受け止めた。

「俺の判断が気に入らんと言うのなら、力で全てを決めるまで。……ただし、無関係な者を巻き込むのは、おまえの流儀ではなかったはずだが？」

クラレンスが頷くと、レイグルは簡潔に問い返した。

「よかるう。——では、どこでやる?」

その時、フィランダーが大きく息を吸い込んだ。泰然と二人の会話を聞いていた彼だが、今やはっきりとレイグルの動きを見守っている。それはあたかも、盟友の運命を見定めるようでもあった。

もちろん、サラは言うに及ばず。

目に見える変化もなく落ち着き払っているのは、クラレンスとレイグルの二人のみ。針が落ちても聞こえるほどの静寂が、場を支配した。

緊張の数秒が経過した後、クラレンスの肩が微かに揺れた。次に破顔し、少年のように明るい笑い声を立てる。

「はははっ。いいな、その返事はとてもいいっ。僕の好みだ!」

レイグルは眉をひそめたが、そのうち黙したまま席に着いた。続いてフィランダーも自分の席に座る。一人だけ迷っているサラに、レイグルが声をかける。

「俺の横に座るがいい」

「は、はいっ」

いそいそと着席したサラを皮肉な目で見やり、最後にクラレンスがレイグルの正面に座る。

「うん、君は魔族の戦士に相応しい。君に免じて、今は僕が退いておこう。サラを殺す

のは保留する。代わりに、もう一つの提案をするよ」

「……言ってみろ」

短いレイグルの問いに、クラレンスは愉快そうに告げた。

「僕も君を手伝いたい」

サラが小さく声を上げたが、クラレンスを見て、慌てて口を閉ざした。

だが、クラレンスはサラなど見向きもしない。先程の発言など、忘れたような顔をしていた。

「指揮も君が執ればいいさ。一緒にいる間は、僕が身を慎む。君とも色々あったが、全て水に流そう……とにかく、君達のやり方が僕の流儀に合う間は、ね」

レイグルは即答しなかった。レイグルは即答しなかった。

考え込むようにクラレンスを眺めている。身を慎むというのはクラレンス流の言い方で、遠回しに「命令権はレイグルにある」と認めたに等しい。レイグルに勝るとも劣らない——いや、あるいはそれ以上の力を持つ彼としては、思い切った提案なのだ。最大限の譲歩をしたと考えるべきだし、もちろ

んレイグルもそのことを理解している。最大限の譲歩をしたと考えるべきだし、もちろんレイグルもそのことを理解している。

よって、考える時間はさほど長くはなかった。

「よかろう……俺の行く道に従うというのなら、拒む理由はない」

「話は決まった！」

間髪を入れずにクラレンスが返す。

フィランダーの方を見て、軽く頷く。

「しばらくの間、よろしく頼むよ、フィランダー。君は僕のお気に入りだ、仲良くしてほしいな」

フィランダーはほっとしたように少し息を吐いた。

「おまえにそう言われるといささかこそばゆいが……俺の方こそよろしく頼む」

「可能なら、僕だって最後まで仲良くやりたいよ、本当に」

さりげなく独白した後、クラレンスは椅子の背にゆったりと身を預けた。

「ところで、話の途中だったけど、デューイを殺した相手が誰か、まだ言ってなかったね。真犯人はだいたい興味深い相手だよ、レイグル。多分、君は興味を持つはずだ」

クラレンスは雑談に紛らわせ、語り始めた。

デューイを倒したアリサという女戦士と、その戦いぶりを。

……ただし、レインの妹を名乗る女の子については、特にレイグルには知らせなかったのである。

第一章 スリーピングビューティー

「………汝を滅ぼす！」

クレアが声なき声でそう宣告した時、シエルファは相手の茫洋とした瞳に、身が凍るような恐怖を感じた。

立ち尽くしたままのシエルファに、ラルファスが早口で囁く。

「陛下、王宮の中に逃れてください。ここは、私が防ぎますっ」

「僕だっていますっ」

異変を察知して駆け戻ってきたナイゼルが叫んだ。

マントを脱ぎ捨てた彼は、既に抜剣している。ただし、誰よりも先に行動を起こそうとしたのはクリスだった。

クレアは、クリスとシエルファ達を分かつようにその中間に降り立っていたのだが、クリスは一瞬、クレアを飛び越えてシエルファの方へ行く気配を見せた。ところがそこで、あたかもその意図に気付いたように、クレアがクリスを振り返った。手が、さりげ

なく腰の刀に伸びている。

「もちろん、クレアはクリスを通す気などないのだ。それを見た瞬間、シエルファは思わず叫んだ。」

「わたくしのために無理をしないで、クリスっ。あなたは逃げてくださいっ」

数少ない友達だと思っているクリスが、この女性に殺される場面など見たくはない。

クリスはそれを聞き、ぴくっと両耳を動かしたが……もしも彼が何か考えたにせよ、それは刹那の間だった。

クリスは今度こそ迷わず背後へ駆け出し、素晴らしい跳躍で軽々と城壁を飛び越え、夜の闇へと消えてしまった。その素早いことといったらなく、その場にいた全員が、反射的にクリスを見送ってしまったほどである。

「有り難い……レインを呼びに行ってくれたか！」
ラルファスの呟きに、クレアが返す。

「賢い馬ですね。私を相手にするより、あの方を呼びに戻る方が勝算が高いと見たようです。私にとっては迷惑な選択ですが」

歓談するがごとき落ち着いた口調のクレアに、無言でナイゼルが斬り掛かった。

最初から機会を窺っていたようで、ラルファスが止める暇もない。

裂帛の気合いと共に長剣が振り下ろされ、クレアの頭を割らんとする。だがその瞬間、青白い魔法のオーラが綺麗な半円を描き、歪んだ音が響く。

彼の斬撃を、抜いたクレアの刀が下方から弾いたのだ。そしてナイゼルがよろけたのに合わせ、クレアはすつと間合いを詰めた。

そのままだと、ナイゼルは空いた胴を斬り裂かれていただろう。しかしラルファスが一瞬早く踏み込み、同じくクレアに斬り掛かっている。ところがジャステイスの一撃は、寸刻前のナイゼルと同じく、クレアの刀に容易く受けられてしまう。

「——むっ」

その音と激しい閃光からして、見ていたシエルファにさえ、余程のパワーで剣撃を弾かれたのだろうとわかった。ラルファスは受けきれずに何歩か後退したが、振り向きもせず叫んで寄越した。

「陛下、早く王宮へっ。この女は我々にお任せください！」

「でも、ラルファスさまがっ」

驚いたことにラルファスは、優雅な——しかし力強い剣舞を見せるクレアに、いささか押されていた。ナイゼルも同時にかかっているのに、易々とあしらっているのだ。ジャステイスによる剣撃を刀で打ち流してラルファスをよろめかせたと思えば、今度はさすが疾風の踏み込みを見せ、横から突きを繰り出そうとしたナイゼルを逆に仰け反らせる……サンクワール屈指の剣士二人を相手にしながら、驚くべき剣技の冴えを見せ、一歩も退かない。

それでも、ラルファスは巧妙にクレアの行く手を遮り、断固として彼女をシエルファ

に近付けずにいる。

「ナイゼルもいてくれますし、私なら平気ですつ。すぐに衛兵も駆け付けましょうつ。それより陛下は早く王宮へ！」

彼の言うことも道理だった。

シエルファが残ったところで戦力にはならないし、二人が余計に戦い辛いだけである。おまけにナイゼルが先に笛で呼んでいたせいで、兵舎の方からばらばらと衛兵達が駆け付けてくるのが見えた。その先頭には、出かける時に見たミランがいる。シエルファはもう迷わず、彼の方へ向かって走った。

「陛下、ご無事ですか！」

「は、はいっ。それよりラルファスさま達を助けてくださいっ。それとレインもまだお外で戦いの最中なんですつ」

立て続けに言われ、ミランは困惑顔になった。そこへ、ラルファスが遠くから怒鳴った。「陛下をお連れして王宮内へ逃れてくれっ」

ミランはクリスそっくりに、一瞬だけ迷いを見せた。シエルファを後続の衛兵に任せ、自分はラルファスの応援に向かう気になったのかもしれない。しかし、クレアがこちらへ来ようとしているのを見て、決断した。

「さっ、こちらへ」

「大丈夫です、走れますから！」



差し出された手を固辞して、シエルファはスカートの裾をたくし上げ、自分から駆けた。とりあえず自ら王宮へ行き、ありったけの応援を呼びよせようと思ったのである。既に大勢がこちらへ駆け付ける途上にあるが、援軍が多いに越したことはない。それだけでなく、あの女性には恐ろしく強そうだし。

ところが幾らも走らぬうちに、後ろでミランが叫んだ。

「いけないっ!? 陛下、止まってくださいっ」

「……えっ」

嫌な予感がして、シエルファは言われた通りに停止し、かつ夜空を見上げた。

理由はない。単なる勘だ。

ちょうど頭上を、身を丸めたクレアが回転しつつ飛び越えたところだった。そして空中で身を捻り、シエルファの眼前に着地した……ほとんど足音もなく。

「嘘だっ」

すぐに横に立ったミランが呻いた。

「跳べるような……そんな短い距離じゃなかったぞ!」

シエルファはもちろん、クレアも直接の返事はしなかった。

ただ彼女は、シエルファに向かって叫んだ。

「やっと射程に捉えました!」

同時にさっと両手を広げ、何かをするのが見えた。ノエルが転移する時に行う手つき

に似ていたが、他に気を取られてシエルファは見えていない。

というのも、もう一人、誰かが横から突っ込んできたのだ。

その刹那、全ては眩い光に包まれ、周りからふっと物音が途絶えた。



——景色が復帰するまで、ほんの数秒だったろう。

しかし、オレンジ色の光が消えた時、既にシエルファ達は見慣れない場所に立っていた。いつの間にか、夜から夕暮れへと時刻が変化している。

なぜわかるかというと、大きな穴が開いた石壁の向こうに、沈みゆく夕陽が見えたからだ。

立っているのはやたらと天井の高いホールのような場所だったが、長らく放置されていたと見え、あちこちが崩れている。

それどころか、三分の一ほどの面積は上階の天井ごと崩れていた。

「ここは……城の廃墟? しかもガルフォートじゃないぞっ」

ミランが狼狽した口調で指摘した。

しきりに周りを見渡している。

「そう、ここはあなたがまだ見ぬ世界ですよ、ミラン」

意外にも、ホールの中央に立つクレアが返した。

「もっと簡単に言うと、ミュールゲニア世界ですらありません」

青白いオーラに包まれた刀を手に、静かに立っている。いつの間にか、見開く赤い瞳がシエルファを見据えている。

「ここが貴女の死に場所になるでしょう……覚悟していただきます！」

淡々とした口調に、シエルファは我知らず後退退っていた。

「ええとその……あの、敵なんですか」

シエルファの左隣に並んだセルフィーが、震え声で言った。

そう、彼女は最後の瞬間、最後尾から軍装の兵士達を一気に抜き去り、全力で駆け付けたのである。真っ先に飛び出してシエルファを守ろうとしたのだ。お陰でミランと同じく、ここに一緒に飛ばされてしまったらしい。

それはいいのだが、なぜか可愛い花柄の夜着に、中古剣持参という格好だった。つまり、たった今、ベッドから飛び出してきたような服装である。

シエルファとミラン……それに敵のクレアまでが揃って注目したせいか、セルフィーはじわじわと頬を染めた。片手で胸の辺りを隠すようにして、

「……あの……あんまり見ないでくれませんか。これの下、下着を着けてないんです」

などと、特にミランに懇願する。

言ったそばから、「くしゅんっ」と可愛くくしゃみなどした。

ここはガルフォートと違って冬真っ直中というわけではないが、真夏というほど暖かくもない。この格好では、寒くて当然だろう。

「こ、呼集の笛を聞いて、飛んできたんです。その、今日は早めに休んでいたものから、ついこんな格好で。こ、ここはさっきよりは温度が高いですけど……で、でもやっぱり、寒いですっ」

声が震えていたのは、寒さのせいだったらしい。

「見上げた心がげだと思っうよ、うん」

慌ててミランが目を逸らす。ただ、密かなため息がした。ホールの中央辺りにいたクレアが、シエルファ達に軽侮の口調で述べた。

「緊張感のないことですね。この光景を見て、何も感じませんか。もっと他に気にすることがあると思いますが」

「將軍のそばにいたら、この程度でいちいち驚いてられないさっ。今晚なんかクリスのお陰で、既に腰が抜けるほど驚かされたし。アレはホントにびっくりした！」

なぜか自慢そうに述べ、ミランが前へ出る。

既に長剣を抜いていた。

「どこかに飛ばされてしまった……それがわかってりやいいよ。もっと大事なことは他

にあるし。それより君、僕らを黙って帰すつもりは……ないだろうなあ、やつぱり」

最後はあきらめの口調だった。

実際、クレアはじわじわとシエルファ達の方へ歩を進めている。左手に持った抜き身の刀が、青白いオーラで不気味に光っていた。

目が見えない割に、ホールに転がる瓦礫などは苦もなく避けて進んでいる。

「あいにくですが、ご要望には応えられません。結界の外に出た彼女を探知して以来、やつと千載一遇のチャンスをつえたのですから」

ロクに聞かず、シエルファは叫んでいた。

「待って！ この人達は関係ないですつ。殺すなら、わたくしだけにすべきじゃないですかつ。あなたが狙っているのは、わたくしだけのはずつ」

「そう、確かに私の狙いは貴女ですわ」

クレアは立ち止まり、上品に頷いた。

「他の二人を帰す分には、別に反対しませんよ。余計な戦いを回避出来るなら、私としても助かります」

「では、そうしてくださいっ」

「へ、陛下！」

「だめですよつ」

ミランとセルフィーの二人が、同時に叫んだ。さらに怒濤の抗議をしようとした二人

に先んじて、シエルファがまた叫ぶ。

「さあ、今すぐ二人を戻してくださいっ」

「いいですけど……そのためには、お二人が貴女からもう少し離れてもらわないと。でないと貴女まで巻き込んでしまうので、術が使えません」

それを聞いた途端、奇しくもミランとセルフィーの二人は左右から同時に、より一層シエルファに近付いた。それこそ、くつつくほど。ミランの腕が、少しだけシエルファの肩に触れる……お陰でシエルファは、彼が微かに震えているのを知った。

ただ、ミラン本人はセルフィーと顔を見合わせ、苦笑していた。

「……ミラン隊長、さすがです」

セルフィーのセリフに、ミランははにかんだように笑った。

もう震えは止まっていた。妙に透き通った表情をしており、彼らしくもなく落ち着いていた。

「そんなこと言われたの、生まれて初めてかもしれない。……君もさすがに、将軍が見込んだ人だと思うよ」

「それがあなたの方の選択ですか」

また言い募らうとしたシエルファより先に、クレアが醒めた声で返す。

「無駄な人殺しは好むところではありませんが、お二人が望むのなら、やむを得ないですわね」

刀を持ち上げたクレアに、セルフィーが抜剣しつつ叫ぶ。

「待って！ どうして陛下を狙うのっ」

クレアは答えず、黙って刀を構えた。

この一瞬、「いけないっ」とシエルファは思った。

ラルファスとナイゼルの二人をもつてしても、クレアを止められなかったのだ。セルフィー達とて弱いわけではないだろうが、しかし間違ってもこの女性に勝てるとは思えない。

彼ら自身、既にそのことを悟っている気がする……死を覚悟しているように見えるからだ。

どうすればいいの……どうすれば。

先程からシエルファは、いつも肌身離さず着けているコインのネックレスを、両手で握り締めている。ここが何処であろうと、このコインを使う限り、シエルファは逃げられるだろう。しかし、あいにくコインの魔力はこの二人にまでは及ばない。仮にお互いしっかり手を繋いでいても、元に戻るのにはシエルファだけとなるはず。

……でも、それであの女性があきらめてくれないでしょうか？

シエルファはそこに光明を見いだす。

狙いは自分だけなのだし、自分が消えさえしたら、二人は助かるのでは？ 自分を殺そうとしている——という点を見れば、この女性は極めて理性的な性格に見える。

二人を助けてもいいと言ったくらいだし。ならば、ここで自分が消えれば、戦いを回避出来るかもしれない。

クレアが疾風の如く駆け出したのを見て、シエルファはほとんど決心しかけていた。しかし、叫ぼうとしたその時、また世界が劇的に変化した。

眼前の全てが消え失せ、シエルファの周囲が闇に沈んだのだ。

「——え、ええっ!？」

思わず声に出したが、応える者はいない。それどころか、他の三名の気配さえ消えている。立っているのはシエルファのみだった。すぐそばにいたセルフィー達の姿が、いつの間にか消えている。

「……レ、レイン」

心細くなつて最愛の人の名を呼んだ途端——
唐突に誰かが答えた。

『今は自分にかする時よ、シエルファ』

「えっ……どなたですっ!？」

周囲を見渡すが、相変わらず何も見えない。再び別次元に飛ばされたような有様であり、漆黒の闇以外は何も見えなかった。

「悩んでも、どうせ今のおまえには理解できない。我が力でおまえの感覚を加速させて体感時間を長くし、なおかつ私の思念の中に呼び出したのよ。この急場に会話が出来るのは、そのためだが……説明してもわからないでしょ」

ひどく冷静な……いや冷静といっているいい声質だったが、不思議なことに、なぜかシエルファは懐かしい感じがした。

シエルファのようなソプラノの声音ではなく、女性としてはかなり低い声である……そう、この「誰か」は女性だったのだ。「彼女」が続けて言う。

「レインにもらったコインを使うのは感心しないわね。良い手とはいえないわ。殺さないまでも、あの女が二人を捕らえて、レインと私達を誘き寄せる餌にする可能性が高い。敵に主導権を握られるのは面白くないし、そもそも——」

少し間を置き、声に若干の笑みが混じる。

「個人的な意見を言えば、私達の宝物をそんなことに使うのは嫌よ。なにしろ、レインに贈られたものなの」

「……私達のじゃなく、わたくしが贈られた宝物ですつ」

怖くて心細いのに、シエルファは反射的に反論していた。レイン関係のことになると、どうしても自制が利かないのだ。

「いいえ、シエルファ。『私達』で合っている。今や私とおまえは、表裏一体の存在なのだから」

ふいに声が近くなった。

真の暗闇の中に、微かに半透明の姿が浮かぶ。シエルファとは違い、やや吊り目がちの碧眼をした、冷酷そうな少女だった。髪の毛の長さと髪型は似ていたが、この少女の方は見事な銀髪だった。

「しばらくぶりね。……私もようやく、おまえと話せるほど力を取り戻せたわ」

「しばらくぶりつて……あ、貴女とは初対面ですわ」

「違うわ。かつてはよく、夢の中で会っていた。ただおまえがそれを忘れていただけ。その証拠に、私の声になんとなく覚えがあるだろう」

シエルファは沈黙した。

確かに記憶を刺激される……この人を知っているような気がしてならない。そういえば最近、ふいに記憶が途切れることがあった。それもこの人が何か関係していたのだからか。

不安だし、その辺をじっくり尋ねたいところだが……残念ながら今は、そんな場合ではない。

「お話は後ほど伺います。今は、わたくしを元の場所へ戻してくださいましっ」

「今だっておまえは、元の場合から動いてないわ。やはり、理解できないようね」
素っ気なく言い返された。

直後、悩ましい吐息と共に、右手で銀髪を掻き上げる。

「とはいえ、加速化にも限界がある。そろそろ危ないのも事実だろう。あの二人の安全はさほどの問題ではないが、怪我でもするとレインが悲しむわね……それは私も望まない」

あまりと言えばあまりな言い方に、シエルファは絶句した。自分もかなりレイン寄り……というよりレイン中心な考え方だが、この少女はさらに遠慮がない。

「言っておくが」

少女はシエルファを見やり、薄く笑った。

「おまえは私で、私はおまえなのよ。ひどい言い方だと思うのは勝手だが、実はおまえの本音も同じはず。お互い、救いようがないレイン馬鹿だわ」

「そんなっ。わたくしは……ミランさんとセルフイーさんも嫌いじゃありません。レインと比べるのは論外ですけど」

「嫌いじゃない」とか『比べるのは論外』とか、言葉の選択が少々迂遠なだけ。やっぱり本音は同じよ」

少女の言いように、シエルファは反感を覚えつつも反論できなかった。言い方があまりにも断定口調のせいもあるが、自分でもふとそんな気がしてきたのだ。

いずれにせよ、今度は相手の方が話を変えた。

「さあ、今は無駄話の時間じゃないわ。しばらく私に交代なさい、シエルファ。おまえができないことをしてやろう……」

確かに、今の自分では戦力にはならない。

それは冷厳な事実であり、シエルファは唇を噛んだ。

「交代？ わ、わたくしの身体を使うということですか。貴女なら、あのお二人を助けられると……そう仰るの？」

「ええ、おそらくね。表層意識の主導権がおまえにある以上、長時間は動けないけど。しかし、それほど時間を掛ける気はないわ。後腐れのないよう、あの女を叩きのめす。いい加減、うんざりしているのよ！」

彫刻のように完璧な顔立ちが、少し苛立ちに歪む。過去に、なにやらクレアと名乗る女性とあったのかもしれない。自信は有り余っているように見えるが、本当に大丈夫なのだろうか。

……それに、こんな訳のわからない話に、迂闊に乗っていいものだろうか。シエルファは眉根を寄せた。

「あいにくだけど、他に方法はないわ。ちゃんと主導権を戻すから、おまえは一時、眠っていないさい。自ら受け入れてくれる方が、まだ長く保つの。……さあ、この手を」

——握りなさい、と彼女が纖手を差し伸べる。

磨き上げられたように綺麗な手だった。

「待ってください！ 本当にわたくしは、元の自分に戻れますかっ」

「戻るわよ。無理に交代することも今なら可能だけど、どうせなら受け入れてくれた方が長く動ける……それだけよ」

少し考え、シエルファは上目遣いに尋ねた。

「……レインに誓って？」

シエルファの囁き声に、相手の手が一瞬、止まった。少女は……ちゃんと白目のある碧眼を大きく見開き、口元に手をやって笑った。

「さすがにシエルファだ。上手い言い方をする。なるほど、そう言われると絶対に誓いを破れないわね。神に誓わせたって、私には無駄なものね」

見た目通りの年齢に相応しくすくす笑いを広げ、彼女は大きく頷いた。

「いいわ、レインに誓おう。おまえはすぐに目覚めることになるわよ」

それを聞き、シエルファは自分から少女の手を握った。自分より年下に見える……しかし、自分より遙かに勝ち気そうな少女の手を。

握った途端、自分の意識が、どこか深いところに落ちていく感じがした。眼前の高貴そうに見える少女の姿も、どんどんボヤけていく。彼女ではなく、自分の意識が消えかかっているのだ。

「……最後に教えて……くださいまし。貴女の……あなたの……お名前は……」

ちゃんと返事があったのだが、その時にはシエルファの意識は途切れていた。



まだ名も知らぬ敵が駆け出した時、セルフィーはとっさにシエルファの手を引っ張った。この際、無礼とか非礼とか言ってる場合ではない。

「陛下、お下がりくださいいっ」

特に返事はなく、シエルファは素直に数歩、後ろへ歩いた……視線を前方に固定させたまま、自動人形のごとく。

通常であれば彼女の態度に奇妙なものを感じただろうが、セルフィーはそれどころではなかった。

既に敵は、迎え撃とうと構えたミランの眼前に躍り込んでおり、セルフィーがシエルファを後ろへ待避させた刹那、激しい剣撃の音がした。

「——！ つうっ」

敵の女性が真つ向から振り下ろした斬撃を受けたミランが、がくりとよろめく。横顔に、ありありと驚愕の表情が窺えた。驚いたことにミランは、その場で膝をついてしまっている。あの細身の女性は、見た目より剛力らしい。

ミラン隊長が危ないっ！

そう判断したセルフイーは、夢中で敵に向かった。

「やあっ」

道場で修練を積んでいた頃を思い出し、お腹の底から声を出す。

敵の胴を狙い、思い切って真横からの斬撃を放ったが――

「……未熟です！」

叱声と同時に青白い輝きが閃き、セルフイーの一撃を気安く長剣ごと跳ね上げた。

「う、うそっ」

腕が痺れた。

レインクラスの怪力で下から剣を弾かれたのかと思ったほどで、セルフイーは両手を上げたまま吹っ飛ばされそうになった。剣を放さなかっただけでも、奇跡である。

そして、耳を掠める風切り音――

視界の隅にしなやかな足が旋回するのが見え、セルフイーは背中からホールに跳んで避ける。ぎりぎりだった。前髪を掠め、敵の回し蹴りが唸りを上げて通り過ぎた。

避けたのはいいがそのまま後ろに倒れてしまい、セルフイーはしたたかに背中を打った。

構わず、声を立てずに必死で横に転がる。追撃されると思ったからだ。

だが……転がっていた僅かな間に、ミランがまた敵に斬り掛かっていたらしい。彼の小さい悲鳴を聞き、セルフイーは無理して跳ね起きた。

……そして見た。

魔剣によって肩口から胸にかけ、ミランが斬り裂かれる瞬間を。避けきれなかったのだ。鮮血を噴き上げ、ミランがその場に頽れる。

「た、隊長おおっ」

上半身を弱々しく痙攣させているミランを見て、セルフイーは涙が溢れた。あの傷では……もう助からないっ。

「よくもおっ」

純粹な怒りが身体を動かし、セルフイーは剣を突き出したまま突進した。いつもならそんな無茶は絶対にやらなかっただろうが、ミランがやられたのを見て、冷静な考えなど消し飛んでしまっている。

「ああああーっ」

刀を手にした敵が、急ぐでもなくセルフイーを振り向く。何か小さく呟いた。

途端に、彼女の身体が一気に巨大化した。

「なっ」

神速で距離を詰められ、眼前に飛び込まれたせいだが、セルフイーにはそこまでわからなかった。

「うっ」

不気味な魔剣の輝きが一閃したと思ったら、次に長剣が歪んだ音と共にへし折れた。

同時に素早く敵の膝が跳ね上がり、腹に膝蹴りまでぶち込まれてしまった。お腹を中心に苦痛が弾けた。

この時点でセルフィーは気絶しかけていたが、倒れそうになったところに二の腕を掴まれ、軽々と投げられてしまう。

長い滑空の末、横手の石壁に叩き付けられ、気絶もできずにまた呻いた。石床に落ちて即、立とうとしたが……果たせない。四つん這いになって呻くのがせいぜいである。口元から鮮血が滴り、ホールに点々と落ちた。背中はともかく、膝蹴りのせいでどこか内臓を傷めたらしい。

首を振って顔を上げる。視界がぐらぐらと揺らいでいた。

敵はセルフィーなど無視していた。そのまま疾走を続け、棒立ちのシエルファに向かっている。

「……へ、陛下下つ」

セルフィーの瞳から、また涙が溢れた。

もう止められない。陛下は殺され、わたしは二度とあの人に顔向けできなくなるだろう。

「ここまでですっ」

敵が大きく魔剣を振り上げる。

立ち尽くしたままのシエルファを、真つ二つにしようかという体勢だった。

だがそこで――

四つん這いのまま、セルフィーは見た。

敵の突進がいきなり停止するのを。それはまさに、不可視の壁にぶち当たったような不可解な止まり方であり、しかもその直後、彼女の身体は宙に浮いた。

「おのれっ」

敵が怨嗟の声を上げる。

しかしそのまま、後方へ投げられた。

投げられたとしか言いようがない。見えない手が敵の身体を引っ掴み、全力で投げた……そう見えた。

けたたましい破壊音と共に、遠くで壁が崩れ落ちる音がした。

「な、なに……なにが起こったの」

頬を涙で濡らしたまま、セルフィーはシエルファを見る。

少女君主の身体にいつの間にか芯が戻っていた。しかも、いつになく不敵な笑みを浮かべ、傲然と顔を上げている。

「ふふふ……あははっ……あーっはっはっは!! あー、気分がいいっ」

いつもの彼女が絶対にしない類の豪放な笑い方で、心の底から楽しそうに哄笑している……あのシエルファが、だ。

真つ青な瞳が、いつになく好戦的な輝きに満ちていた。

「さあ、これからが本番よ。好き放題にやってくれた礼をしなくてはね」
 哄笑の後、冷え切った声が宣言する。

「レインと私の行く手を阻む愚か者は、どいつもこいつも冥界へ叩き込んでやるわ！」

別人のようだったが、その澄み切ったソプラノの声は、確かにシエルファ本人だった。別人では有り得ない。

「へ、陛下……」

セルフィーが掠れた声で呼ぶと、シエルファはやつとこちらを見た。

いつものほにかんだ恥ずかしそうな視線とは違い、やけに醒めた目付きだった。

「おまえは気に入らないんだけど、仕方ないか」

「……は？」

何度見直してもシエルファ本人に間違いなかったが、やはりどうしてもあの姫王には見えない。たおやかな雰囲気は綺麗に消え去り、背筋を伸ばしたその姿と表情は、あたかも冷徹さと苛烈さが同居したようである。

背丈まで違って見えた。

シエルファは元々、決して背が低い方ではないが、伏し目がちな目線と控えめな態度のお陰で、いつもは実際より少し低く見える。

しかし今は、背筋をぴんと伸ばした姿勢のせいかな、本来の身長よりさらに数センチは高く見えた。

その姫王が、いきなり叱声を叩き付けた。

「セルフィー!!」

「は、はいいいっ」

お腹の痛みが回復していないが、セルフィーは思わず大声で答えた。

「いつまで床に這ってるの! さっさと立って、こちらに来なさい。時間がないっ」

……なぜ、いきなりこんな傲慢な態度に?

驚きつつも、セルフィーは心配と義務感から何とか立ち上がり、前屈みでまたたと彼女の前に歩み寄る。

前に立つとシエルファは、おびなりにセルフィーを眺めた。具体的には、上から下まで全身にさつと視線を走らせたのだ。

無事を確かめるといふより、何かを確認……あるいは点検するような目付きに見えた。「臓器の一部から出血している。いちいち手間のかかる娘ね。せめて、時間稼ぎくらいはまともにできないのかしら」

酷評すると、シエルファはセルフィーの黒髪の上で少し手をかざした……ほんの二秒ほど。

「……あ」

急に身体がほんわかと温まり、セルフィーは息を吐く。驚くべきことに、壁に叩き付けられた痛みと傷が、跡形もなく消えていた。前屈みになってお腹を押さえていたのに、今やまるで平気である。試しに手をどけて真っ直ぐ立つてみたが、前より調子がいいくらいだった。

全身が……本当に温かい。

「まさか……これは、陛下の御力……」

眩いたものの、あいにくシエルファはとうに歩き去り、倒れ伏したままのミランの方へ向かった後だった。

「そうでした！ 隊長っ」

セルフィーもたちまち彼が心配になり、大慌てで追いかけた。

ミランの俯せた身体は全く動かず、倒れた下で、鮮血が広がりつつあった。呼吸は……一応はしているようだが、今にも止まりそうなほど弱々しい。死は時間の問題に見える。

「た、隊長がっ」

セルフィーはまた泣きそうになったが、シエルファはいきなり意表を衝いた。

すなわち、めんどくさそうに立ったままミランの身体の下に片足を入れ、どさっとひっくり返したのだ。……それなりに体重もあるだろうに、実に軽々と。

「そ、そんなっ」

己の分は知っていたが、それでも咎めずにはいられなかった。

「ひどいじゃないですかっ。隊長は死にかけてるのにつ」

「黙りなさい！」

一言で切り捨てられた。

セルフィーを見向きもせず、シエルファはミランの脇にしゃがみ込む。また少し観察したかと思うと、苛立たしように金髪を掻き上げた。

「ああ、もうっ!? まだ力が戻りきってないのに、なんてことかしら！ 死にかけてるわ、こいつっ。なんでこう、使えないヤツばかりをレインはっ」

言いかけ、慌てて首を振る。

「いいえ、彼に文句を言っちゃ駄目ね……こいつらが悪いのよ、こいつらがっ。そう、弱いこいつらが全部悪いわ。レインに会う前に、私が殺してやりたかった！」

矢継ぎ早に物騒なセリフを並べる。

その後、見るからに嫌そうな態度で、今度はミランに手をかざした。セルフィーの時より、一秒ほど長かっただろう。

いきなりミランが身動きした。

「げほっ」

ミランが咳き込んだのを見て、セルフィーは両手を口元にやった。

「う、嘘おっ」

目を開いたばかりのミラン本人は、いぶかしそうにシエルファを見上げている。

「あれ、陛下……ですか」

「冥界王のもとへ行ったつもりだったの、大馬鹿者っ。レインに言い訳するリスクがないや、この私だっっておまえなど!!」

「え、えっ」

ミランが驚いたように目を瞬く。

その気持ちはよく理解できたが……しかしミランの反応は、セルフイーとは若干異なった。すぐに顔に理解が広がり、

「あ……クリスタルパレスの時の……うわあ、ま、またですか」

シエルファの真つ青な瞳に、雷光が走ったように見えた。

「何が『またですか』よっ!! そのまま死んでしまいなさい——この甲斐性なしっ、役立たずっ。おまえ、他に言うことはないの? 『ご迷惑をおかけしました』とか『お二人の盾になって死ぬ予定の僕なのに、いきなり犬死にしそうになってすいません』とかっ。それが、間抜けな顔で『またですか』とは何事かしら!!」

嵐のように罵詈雑言をおつけ、シエルファはミランを睨め付ける。せっかく復活した彼が、本気で震え上がるほどの目付きだった。

「す、すいませんっ。ええと、なんだかわかりませんけどっ」

シエルファはミランの返事など聞いていなかった。

「時間がない。もういいから、上半身を起こしてみなさい。——早くしなさいっ、遅いわっ」

「は、はいっ」

綺麗なソプラノの声に罵倒され、ミランが文字通り跳ね起きる。

まだ立てないものの、一応、すっかり半身を起こした。

「傷は塞がったようね。出血した分は、食事で元に戻るでしょう。次に、深呼吸してみなさい」

目を真ん丸に見張り、言われた通りにミランは深呼吸をした。

「……どこか痛む?」

「まるで平気ですっ。斬られる前より調子いいです」

「そうか、ならいいわ」

まだしゃがんだまま頷き、シエルファはなぜか刀を鞘ごと抜いた。

抜刀せずにそれを振りかぶり、

「では、おまえはしばらく寝ていなさい」

セルフイーが止める隙など、どこにも無かった。ミランは頭を鞘でぶっ叩かれて昏倒し、またしても伸びてしまった。

ぶちのめされる間際、びっくりするほど目を大きく開き、「なにすんですか!」と言いたそうな顔をした。当然の反応である。

次の瞬間、避ける間もなく叩きのめされ、完全に気を失った。

「なっ」

代わりにセルフィーが絶句した。

「いいい、いきなり何をするんですかつ。陛下じゃないんですね、貴女はっ」

「大外れ。私は確かにシエルファ・アイラス・サンクワールよ。なにしろ、今や同一化してしまったものね。元の名前はあれけど、もう以前と微妙に変化したし、あの名に意味などない。今の私はシエルファなのよ。彼女本人も認めないけどね」

混乱した今のセルフィーに、この説明はあまりにもややこしすぎた。というか、訳がわからなかった。とりあえず、ミランを（一度は治した癖に）ぶちのめした方を糾弾しようとしたが……そちらの理由は、彼女が身をもって示した。

立ち上がると、いきなり纏っていた純白のドレスに手をかけ、気安く引き千切ったのだ。呆れるほど素早かった。で、豪華なドレスからボロ切れに成り果てたそれを、そこに投げ捨ててしまう。

「邪魔！ こんなを着て戦えるもんですかつ」

下着姿で颯爽と立つシエルファの姿は……セルフィーの目から見ても魅力的だった。贅肉皆無の上に、群を抜いて足が長いお陰だろう。肌の白さも目に眩しいくらいで、こんな時なのに心底、羨ましくなつたくらいだ。

「も、もしかして、そのためにミラン隊長を」

遠回しに問うと、うんざりしたように横目で見られた。

「そうよ、他にどんな理由があるのっ。レイン以外の男に気安く見せる気はないわっ」

この部分のみ、おそらくシエルファ本人も同じことを言った気がする。

——セルフィーはふとそう思った。

でも、まだそんな関係にはなつてないはずだものっ！ などと反射的に考え、自己嫌悪に陥ってしまった。こんな時に何を考えてるのでしょうか、わたしは。

「のんびり考え事などしている場合じゃない、セルフィー。おまえは隅っこにでもいない。敵が復活するっ」

「えっ」

セルフィーは慌てて、崩れた壁の方を見た。

特に動きなどない。

あの謎の女戦士は、外で盛大に崩れたホールの石壁に埋もれているはずだ。というか、あんな分厚い壁が崩壊するほど叩き付けられ、生きているわけもない。潰れたトマトみたいになって死んでいるに決まってる。

「いくらなんでも、さっきので死んだと思いますけど」

「おまえ、救いようがないほど頭が悪いわね！」

すかさず罵られた。シエルファは本気で腹立たしそうに、どんつと片足を踏み鳴らす。「まだ勝負が終わってないからこそ、動きやすい格好にしたのよつ。意味もなく脱ぐわ

けないでしょ！ この馬鹿、万年貧乏娘っ」

「――さ、最後のはひどいですっ」

唇を尖らせるセルフイーを見て、シエルファは天を仰ぐ。

「レインの苦勞が偲ばれるわ！ おまえとミランのお陰で、力の回復が遅れたし」

その間、シエルファの身体がうつすらと純白の輝きを放ち始めている。それは明らかに魔法のオーラであり、セルフイーの目には、戦闘準備に見えた。

「まだわからないの？ ああ程度で死ぬヤワなヤツじゃない。早くおまえは」

途中で、さつと正面を向いた。

見る見る表情が陰しくなる。

「以前よりタフになってる……前よりは手間がかかりそうね」

言下に、廢墟全体に大音響と衝撃が走り、セルフイーは思わずその場に膝をつく。

第二章 我が王子が来たり

「こ、今度は何ですかーっ」

シエルファではなく、冷静な声が答えた。

「私からも申し上げましょう。どいてください、セルフイーさん。邪魔です！」

その声は……距離がある上に、だいぶくぐもっていた。

「え、今の声って」

立ち上がったセルフイーは、周囲を改めて点検する。天井の一部が抜けた古城のホール内には、他に人影は見当たらない。誰かいるとすればさっきの敵くらいだが、その彼女は今、大きく穴が開いた壁の向こうで、瓦礫の下敷きになっているはずで……え、でもあの瓦礫の山、さっきより量が減ってる気が。

悩んでる途中で、また声が言った。

「巻き添えで死にたいというなら、止める気ありませんが」

今度の声はよりはっきりしていた。

もう間違いようもなく、さっきの敵が発した声だった！